

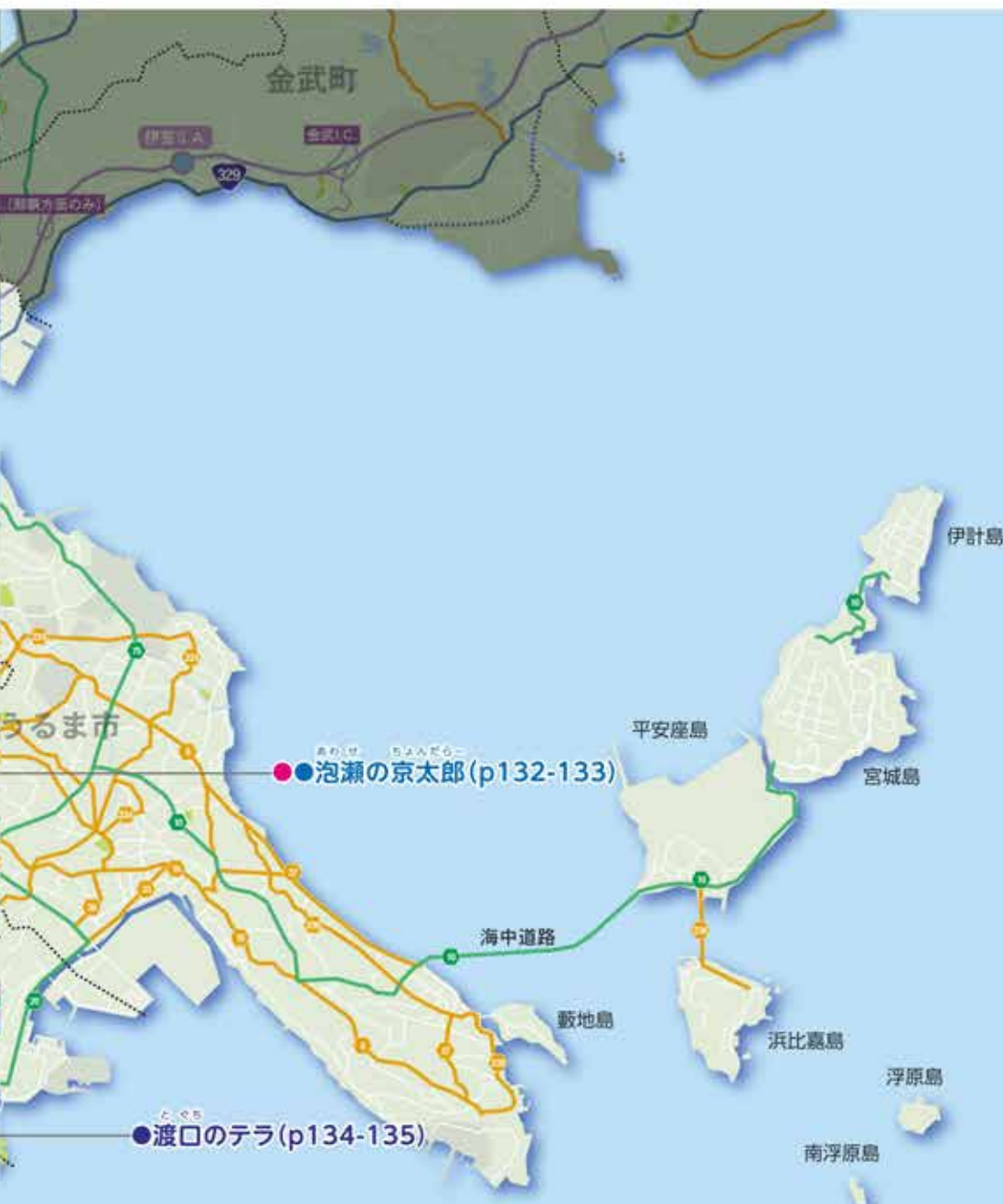
本島中部及び周辺離島

●^{おきなわ} ^{つなび} 沖縄の綱引き (p204-207)

— 沖縄各地

●^{じっしやく} ^{ししまい} 勢理客の獅子舞 (p140-141)





泡瀬の京太郎 (p132-133)

渡口のテラ (p134-135)

津堅島の唐踊り (p130-131)

安里のテラ (p136)

伊集の打花鼓 (p138-139)



凡例

- 国選択 記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財
- 県指定 有形民俗文化財
- 県指定 無形民俗文化財
- 県選択 記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財

道路凡例

- 329 国道
- 県道主要地方道
- 県道一般道
- 沖縄自動車道
- 市町村境界線

津堅島の唐踊り

県選択

● 選択年月日 / 1978(昭和53)年3月24日 ■ 保存団体 / 津堅民俗芸能保存会

● 所在地
うるま市勝連津堅

● 祭事期日
旧暦8月9日～15日

津堅島の唐踊りは、旧暦8月9日～15日に行われる「ハチグッチアシビ(八月遊び)」の中で演じられる男性たちの踊りです。踊り手は、パーランク(小太鼓)を打ち鳴らす者と、扇子を持って踊る者で構成され、「ウフウドゥイ(大踊り)」「イーソーニ(磯に)」の2曲を踊ります。唐踊りの衣装は、頭にヤマトウサージ(日本タオル)の鉢巻を男結びに巻き、太鼓打ちがドゥジンバカマ(胴衣袴)、扇子踊りが芭蕉の着物を着ます。

唐踊りという名称がついているものの、中国系の芸能ではなく、宮古・八重山の島々や奄美周辺の島々の影響を多く受けたものだと言われています。いつ頃から唐踊りと呼ばれるようになったのかは不明ですが、島の人々にとって、歌詞の意味が不明の歌舞ということから名づけられたと考えられます。

戦後途絶えていた津堅島の唐踊りは、1958(昭和33)年に復活しましたが、歌と踊りを覚えていたのは、大城蒲太さんだけでした。大城さんの歌と踊りを早めに記録に残し、伝承者を育成するため、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財として沖縄県の選択を受けました。





あわせ ちよんだらー 泡瀬の京太郎

県指定 国選択

●指定年月日 / 1980(昭和55)年3月31日 ■保存団体 / 泡瀬京太郎保存会 ●選択年月日 / 2005(平成17)年2月21日

●所在地
沖縄市泡瀬

●祭事期日
不定期(泡瀬や沖縄市などの各種行事などに演じている)

国選択記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財

県指定無形民俗文化財

京太郎は、家々を回りながら祝福芸や念仏、人形芝居などを演じた人々やその芸能のことです。琉球国時代、京太郎の演じ手たちは、首里郊外の安仁屋村に住み、士族の屋敷や村を訪れ演じていました。彼らは、フトッキーという人形を操る芝居や本土の春駒、升斗舞、鳥刺し舞などと同系統の踊りを演じていました。次第にその芸を保持していた集団が解体し、芸も消滅しかけて

いた1900年頃に、首里の寒水川芝居において舞台芸能として再演されました。泡瀬の京太郎は、それを村芝居に取り入れたもので、首里から移住した者から喜屋武盛宏をはじめとする泡瀬の青年が教わって、1906(明治39)年、コー(竈)の仕立祝の時に初めて演じられたといわれています。

演目は、太鼓や歌三線の演奏に合わせて演じられ、「早口説」、「扇子の舞」、「御知行」の歌で舞い、馬舞者の狂言、最後に鳥刺し舞を舞います。演者はすべて男性で、胸の前に縦に太鼓を付け、両手に撥を持った太鼓打ち1人、腰に馬の頭部の形をしたものを付け、その手綱を握った馬舞者



御知行(歌詞に知行地の収穫の豊かさを升で置って祝うという意味の言葉があり、右手に陣笠を持って踊る)

2人、陣笠をかぶった舞い手が十数人、歌三線で構成されます。歌詞に意味不明なところもありますが、本土の鳥刺し舞などにみられるような頭韻法、畳句、数え歌形式の古い形をよく残しています。

泡瀬の京太郎は、かつて沖縄で演じられていた祝福芸の様子を伝えているもので、芸能の移り変わりの過程や地域的特色を示す民俗芸能です。



扇子の舞（舞い手は右手に扇子を持ち唄子唄を歌いながら踊る）



馬舞者（馬頭を付けた2人が万歳（まんざい）のように交互に抑揚をつけてせりふをやり取りする）



鳥刺し舞（鳥もちをつけた長い竹さおを投げ上げて小鳥を捕獲した鳥刺しの様子を踊る）

用語の解説



祝福芸

用語集 P226参照

春駒

用語集 P228参照

升斗舞

門付けの万歳芸で、めでたい歌詞で幸運を祈る祝福芸。「泡瀬の京太郎」の演目では「御知行（升斗舞）」。「御知行」は、太鼓打ちが歌い、舞手が右手に陣笠を持って踊る。歌詞に「御知行は一万石」など、知行地の収穫の豊かさを升で量って祝うという意味の言葉がある。なお、「升斗舞」は泡瀬では「シテマ」と呼ばれている。

鳥刺し舞

用語集 P227参照

寒水川芝居

用語集 P226参照

コー（籠）

用語集 P225参照

狂言

用語集 P224参照

頭韻法

用語集 P227参照

畳句

用語集 P226参照

とくち
渡口のテラ

県指定

●指定年月日 / 1981(昭和56)年2月9日 ■所有者 / 渡口区

●所在地

北中城村字渡口・下原

渡口のテラは、南向きの石造り建造物で、「和仁屋間のテラ」「浜崎のテラ」とも呼ばれています。沖縄方言でいうテラは、一般に神の鎮座しているところを意味しますが、この渡口のテラのような家屋状の建造物に対して、その中に神を祀^{まつ}ってあればテラと称するようになったとされます。

テラの構造は、柱の間の長さの桁・梁とも約3.4m、床面から天上部までの高さ約1.35mの方形造りで、石灰岩の屋根には宝珠があります。壁はほとんどが切り石の布積みで、側面と背面には部分的に野面積みが見られます。前方入口部分(幅0.9m×

高さ1.14m)の上部アーチ部分は、1枚の琉球石灰岩で、天井材は砂岩で作られています。

テラの中には、高さ約0.5～0.8m程度の砂岩が4個あり、他に小石がいくつか置かれています。これらの石はビジュル、ボージャーブトッチ(赤子仏)、クワンマガハンジョーヌウカミ(子孫繁栄の神)などと呼ばれています。

地元の渡口や近隣の熟田では、村落の祭祀で祈願したり、また、子宝に恵まれない女性が、子授け祈願をしています。『琉球国由来記』(1713年)に「往昔、渡口村、高時ト申者、靈石ヲ権現ト崇、宮建立仕タル由、伝アリ」とあり、権現信仰の受容と変容を知る上で貴重な拝所です。





テラの中のビジュル



用語の解説



宝珠

もともとは仏教でいう宝の玉のことで、上部先端がとがった火焰を伴う玉を指す。これを得ることでいかなる願いも叶うといわれる。五重の塔などの仏塔の頂上の飾りなどが有名で、琉球梵鐘のつり手部分や石厨子などに文様としても用いられる。

布積み

石を四角く切って、一段ごとに高さを揃えてブロック状に積み上げる技法。

野面積み

自然の石をそのまま積み上げる技法。

ビジュル

高さ15cmから1mくらいの自然石で、沖縄の霊石の一種とされる。ビジュルに対する祈願は、子授け・子育て・豊作・豊漁・雨乞い・航海祈願など多様である。

「琉球国由来記」

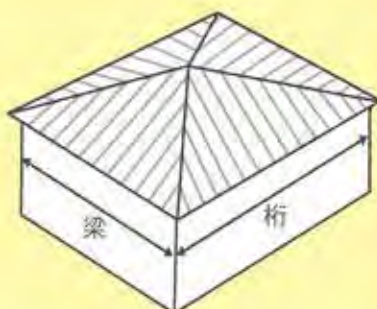
1713年に王府によって編集された琉球国の地誌で、全2巻からなる。王城の公事や官職制度、諸事の由来などの他、各地の御嶽や祭祀について詳しく書かれている。

権現信仰

仏が人々を救うために人間など仮の姿でこの世に現れることを権現といい、日本の神の姿で現れることもあるとされるもので、このような信仰をさす。

方形造り

棟の全てが屋根の頂上に来る形式の屋根で、四角錐の形になる。



あさと 安里のテラ

県指定

●指定年月日 / 1994(平成6)年3月31日 ■所有者 / 中城村・個人所有

●所在地
中城村字安里

沖縄方言でいうテラとは、一般に神の鎮座しているところを意味します。古くからの伝承によれば、テラのほとんどは御嶽にある洞穴で、中に神体としての人骨が納められているともいわれます。後世には、洞穴や家屋状の建造物に対しても、その中に神を祀ってあればテラと称するようになったとされます。

安里のテラは、地元では「ティラ」と呼ばれ、安里集落の南東250mの平坦地に位置しています。周辺にはオオハマボウ、アコウなどが茂り、テラの建物内部には、

4つのビジュルと呼ばれる霊石が祀られています。霊石は権現のお告げで土の中から出てきたとの伝えや、海に漂着したとの伝承があります。五穀豊穰、子孫繁栄、無病息災などで祈願されています。

安里のテラは、沖縄における霊石信仰や洞窟を伴わないテラの形式、性格を知る上で学術上とても貴重なものです。



テラに祀られている4つのビジュル



用語の解説

権現

仏が人々を救うために人間など仮の姿でこの世に現れることを権現といい、日本の神の姿で現れることもあるとされるもので、このような信仰をさす。

ビジュル

高さ15cmから1mくらいの自然石で、沖縄の霊石の一種とされる。ビジュルに対する祈願は、子授け・子育て・豊作・豊漁・雨乞い・航海祈願など多様である。

民俗芸能の宝庫・沖縄

沖縄の民俗芸能を含めた民俗文化財を特徴づけているものとして、次のことが考えられます。まず、地理的に島嶼地域であるということです。

本県そのものが日本本土から遠く離れていますが、本県は大きく沖縄本島と周辺離島、宮古島と周辺離島、石垣島と周辺離島その他と実に60余の島々から成り立っています。

そのことから日本古来の言語、民俗、文化のうちのちまで残すことになりました。

各島々においても、交通の便がよくなかったこともあって、大きな影響を受けることは少なく、島独自の生活が長く続きました。

それでは、民俗芸能についていくつか事例をあげてみましょう。民俗芸能には、各村落で生まれた芸能と御冠船踊が市井に伝播して定着したものが、それらは「村踊り」(村芝居、豊年祭)等で継承されています。

旧暦6月には「ウマチー」の頃に豊作を祝う神事として「綱引き」(8月に行う地域もある)が行われます。綱を引く前後には鉦や銅鑼、鼓、ホラ貝などの楽器を鳴らしてにぎやかに騒ぎ立て、それに合わせて婦人たちの歌や踊りがあります。また、同月には八重山では豊年祭が行われ、御嶽の境内で棒(棒踊り)や踊りが行われます。

旧暦7月から9月にかけて、沖縄本島では「村踊り」が催されます。村踊りの「踊番組」(プログラム)は、獅子舞や舞方を演じて座(舞台)を清めた後に「長者の大主」(翁芸)を演じ、若衆踊、二才踊、女踊、そして雑踊等の端踊が数演目踊られ、狂言、芝居、組踊などと続き、20から30の演し物となります。これらのうち、若衆踊、二才踊、女踊や組踊は、御冠船踊が影響した演目です。舞台芸能は、夕方から深夜にかけて演じられ、数時

間にも及ぶ村落もあります。盆にはエイサーやアングアの盆踊りでにぎわいます。

旧暦7月には「シヌグ」や「ウンジャミ」と称して、誠にと豊稔予祝を祈願する祭事があります。そこでは神女たちが鼓を打ち鳴らしながら神歌を歌って、神扇を持って舞う祭式舞踊が行われます。神女の祭式舞踊では「拝み手」「押す手」「こねり手」などの手振りがあります。この3つの技法は、女踊の手法の基礎をなすものであり、沖縄芸能史上からも重要です。

獅子舞や棒踊りは、ほぼ県内全域に分布する民俗芸能であり、ターファークーは中国から、フェーヌシマは東南アジアから渡来したと言われ、京太郎は本土からの影響があるようです。



野原のマストリヤー



那覇安里のフェーヌシマ

伊集の打花鼓

県指定

●指定年月日 / 1985(昭和60)年10月8日 ■保存団体 / 中城村字伊集打花鼓保存会

●所在地
中城村字伊集

●祭事期日
旧暦8月15日や不定期の各種行事

ターファークー（打花鼓）は、中国服をまとって管楽器を演奏し、打楽器を打ち鳴らして踊る民俗芸能です。1890年頃、伊集のナーファヌヤー（屋号）の者が奉公先の那覇（久米村）でターファークーを教わり、持ち帰って息子（新垣蒲）に教え、若者たちに広めたといわれます。毎年旧暦8月15日に演じていますが、要請に応じて不定期に演じることもあります。

出演者は、筑佐事2人、ガクブラ吹き2人、唐の按司1人、フージョー持ち1人、御涼傘持ち1人、ドラ鐘打ち1人、ブイ打ち1人、ハンシー鐘打ち1人、太鼓打ち1人の11人と三線を演奏し歌う者2、3人となっています。

芸能の形式は行列踊で、踊りの所作は独特です。ハンシー鐘打ち、ブイ打ち、太鼓打ちは、飛ぶ、ひねり、屈伸の連続で次第に激しく踊ります。歌詞はもともと中国語でしたが、現在は、意味不明の歌詞となっています。ターファークーは、本県における中国系芸能の移り変わりの過程を示すものとして価値が高いものです。



(後列左から)筑佐事、ガクブラ吹き、唐の按司、フージョー持ち、御涼傘持ち、ドラ鐘打ち
(前列左から)ブイ打ち、太鼓打ち、ハンシー鐘打ち



筑佐事(右)とガクブラ吹き(中央)



ハンシー鐘打ち



筑佐事、ガクブラ吹き、唐の按司、フージョー持ち、御涼傘持ち、ドラ鐘打ちが退場する



フイ打ち、太鼓打ち、ハンシー鐘打ちで踊る



フイ打ちが退場し、太鼓打ち、ハンシー鐘打ちのみで踊る

用語の解説



筑佐事

琉球国時代の警察や司法にあたる役人のことで現在の警察の巡査や刑事のこと。

フージョー

煙草を入れる道具。

御涼傘

国王や高貴な人が出かける時に、装飾用として使われた中国風の傘。

勢理客の獅子舞

国選択

● 選択年月日 / 1973(昭和48)年11月5日 ■ 保護団体 / 勢理客の獅子舞保存会

● 所在地
浦添市勢理客● 祭事期日
旧暦8月15日(十五夜)

獅子は、霊獣として考えられ、その威力をあげ、獅子を舞わせることによってあらゆる災厄や悪霊が祓われると考えられています。沖縄の獅子舞は、古く中国大陸から直接伝来したとされ、獅子頭はデゴの木材で彫刻し、胴部は棕櫚に芭蕉や芋麻の繊維を混ぜたものを縫って仕立てられます。

勢理客の獅子舞は、旧暦8月15日(十五夜)に、勢理客公民館の庭の仮設舞台上で演じられます。獅子舞の型は11種類あり、儀礼的な「ジャンマー」、遊び的な「モーター」に分けられます。三線、太鼓、ドラの演奏により獅子が様々な舞いますが、「ジャンマー」と「モーター」は、異なる三線の旋律で演じられます。

沖縄本島の獅子舞は、一般に毬遊び、棒食、シラミかき寝返りなどを細かく演じる型が普及しています。勢理客の獅子舞は、豊富な型と細やかな芸、大きく踏み込む足

国選択記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財



運びの所作に特徴があり、県内でも屈指の獅子舞です。



用語の解説



棕櫚

ヤシ科の常緑小高木。その繊維は縄・蓑・網のほか、いろいろな用具の材料として広く使われる。葉はうちわや帽子に、皮は運搬用具のもっこ製作の材料に、幹は垣根の杭や一斗壺(味噌入れ・豆類や麦の保管)の蓋として用いられた。

苧麻

イラクサ科の多年草で、沖縄で織物用に使われた繊維。別名からむしもいい、沖縄諸島では、マーウー、宮古・八重山諸島ではブーと呼ぶ。苧麻を用いた織物では、宮古上布や八重山上布が有名である。